「欲望の受け皿」

― コスプレと承認と愛と―

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程
美術専攻油画研究領域(壁画)
1317910 ユゥキユキ

本論は筆者が名乗る「ユゥキユキ」という作家の作品について「欲望の受け皿」という観点を主軸に考察した制作論である。

「欲望の受け皿」とは、自分と社会、虚構や現実などといった複数の境界領域をつなぐ、いわばフィルター、メディア、仮面、皮膜のような装置である。日常的な例として、自分の理想の姿に近づくよう自撮りに加工フィルターやエフェクトを重ね SNS に投稿し他者の反応を楽しむなど、自身に何層もの皮膜を重ねて見せる行為がある。この皮膜を通した自画像は自分自身の理想の姿、すなわち自らの欲望や願望が投影されており、現実と理想を近づける救済措置として生み出された依代のようなものでもある。これを筆者は「欲望の受け皿」と称することとした。「欲望の受け皿」は自分の欲望に気づくための装置であり、救済装置でもある。そして同時に他者の欲望も受け止める。SNS に投稿された皮膜を通した自画像に対して、他者はそれを承認し楽しみ消費する。「欲望の受け皿」を前提としてコミュニケーションを楽しむのである。

その「欲望の受け皿」の効果に気づいたきっかけが《学生ニート それでも私は出たくない》(2012)という作品である。この作品は自宅の生活空間と展示空間を中継し、スクリーン越しに筆者と対話ができる作品である。筆者が対人関係の悩みから引きこもり状態になった時に、相手を目の前にして対話をしたくないという切実な願いから制作した。その結果中継スクリーンという皮膜を一枚挟むことで、人々が筆者に対して生身で対話するときよりも優しくなったり関心を持ってくれたりと、接し方の違いが顕著に現れた。この時の中継スクリーンは言わば「欲望の受け皿」であり、筆者自身と鑑賞者のコミュニケーションを円滑にする効果があった。おそらく中継スクリーンという皮膜によって生身の肉体が所有する過剰な情報が遮断され曖昧になり、安心して相手と話すことができたからではないだろうか。さらに言えば筆者はその作品において、日常での他者との直接的な対話より、中継スクリーン越しの対話の方が、情報が曖昧になる分相手に対してしがらみがなくなりその相手へ真実味（リアリティ）を感じたのである。

その芸術実践をするための装置として、筆者は 2013 年から「ユゥキユキ」という作家を筆者の「欲望の受け皿」としながら作品制作を始めた。本名の筆者

が作品を考案する演出家だとすると、「ユゥキユキ」は筆者の欲望を受け止め、皮膜を何層にも重ねた演者であるといえる。つまり逆に言えば筆者自身に「ユゥキユキ」という皮膜を被せ、さらに作品に何層もの皮膜を重ねなければ表現行為ができないのである。この皮膜は筆者の感覚的には全て半透明で薄いものである。いくら重ねても筆者自身がほんのりと透けて見える。全くの別物、代替え物ではなくユゥキユキに重なった薄い皮膜の層をめくっていくと筆者自身に行き着く。

これまでユゥキユキの作品はアイドル、コスプレ、BL（ボーイズラブ）といったオタクカルチャーと密接に関わりながら、さまざまな関係性をつなぐ「欲望の受け皿」という装置を主題にし、その効果を芸術実践で検証してきた。本論では筆者がユゥキユキというアーティストを「欲望の受け皿」として用いてどのような表現をしてきたかを紹介し、その意味を現代社会の問題と重ねながら分析する。

第1章の変身という「欲望の受け皿」では、まずユゥキユキの誕生に決定的影響を与えたコスプレ文化とその拡張表現について考察する。

また自身の経験に基づいてコンセプトカフェという約束事の世界で行われる愛情の消費や承認欲求について言及し、その約束事の世界での承認のやりとりを作品化した自作 《ユキテラス大御神✡天岩戸伝説》(2016-2018)について解説する。

第2章の「血縁を編み直す、解く」では筆者の承認欲求の根源である母と娘の関係性において、インナーマザーについて述べる。そして筆者と母にとっての「欲望の受け皿」をモチーフに、母と娘の関係性の編み直しをした作品《「あなたのために、」》(2019-2021)を解説する。またこれまで母と娘の関係性がどのように描かれてきたのか先行事例を取り上げる。

第 3 章の「解かれる役割、その先の愛情」では《「あなたのために、」》に組み込まれた「男装のコスプレ同士の BL による愛情」を描いた映像について解説する。ユゥキユキの作品における BL の表現に着目し、なぜそれが必要だったかを分析する。

終章では「欲望の受け皿」の効果として自らが望まない役割を他者から欲望されることの問題提起をするために、ファンとアイドルの関係性を描く自作品《孤毒なピンク》（2020）について言及する。そしてこれまであげた「欲望の受け皿」の効果とその定義を再確認し、今後の制作における展望の実践として提出作品《ぼくらの愛らんど》(2021)について解説し、今後の展望を述べ総括する。